記録を守り　記憶を伝える

―アーカイブズ学の世界―

学習院大学大学院　教授
人文科学研究科　アーカイブズ学専攻
安藤　正人

学習院大学の安藤でございます。

アメリカ人の講演は自慢話から始まる、日本人の講演は弁解から始まると言いますけれども、私も弁解から始めなければいけませんが。

今日皆様のお手元にあるプログラムには「記録を守り記憶を伝える　アーカイブズ学の世界」と書いてますが、画面には全然違うことが書いてありますし、そもそも所属が去年の３月までおりました国文学研究資料館のアーカイブズ研究系と総研大の文化科学研究科になっております。

これで一目瞭然なように、今日の為に私何の準備をしておりませんでした。

いろいろ多忙を極めておりまして、この記録を守り記憶を伝えるという事で総合的な話をしろとこういうご要望であるということは、了承していたわけですけれども、たかをくくっておりまして、これまであちこちで話した話の中から何か適当につなげればいいだろうと思っておりましたところ、つなげる時間もありませんで、結局これまでに実際使ったファイルの中から一番今日の場に相応しそうなひとつをそのまま持ってきたという、こういうことでございまして、ご勘弁を願いたいと思います。

そういう具合でありますので、お手元に配布する資料も何も無いとこういう始末でしてお恥ずかしい限りであります。

この報告は「アーカイブズ学の動向と科学情報資源の保存・活用方法のあり方」と書いてますけども１年と数ヶ月くらい前になりますかね、広島大学で広島にあります放射線影響研究所、それから広島大学の正確な名前は忘れてしまいましたけれども、原医研ですねそれから長崎大学の原研、こういった原爆被害に関する研究、医療活動等々行っている研究機関が集まった研究会の場で、いわば原爆アーカイブズ、原爆関係資料のアーカイブズに関する今後の活動をどう進めて行くか、そういうお話をさせていただいたことがあ

りまして、私にとってみれば数少ない科学情報資源の保存・活用に関わる活動だということで、今日の場に一番近いかなと思いましてそれを持ってまいりました。

そういうことで中身はこういう事なんですが、(資料 2)「いまアーカイブズが新しい」それから「アーカイブズ学とアーキビスト」このあたりでは一応アーカイブズの日本における現状を総合的にお話することが出来ると思いますが、3 番目の所では「原爆アーカイブズに期待する」ということで、まあ理系というんでしょうか自然科学系の研究機関等の資料をどういうふうにして保存管理していく或いはネットワーク作りをしていくのかというお話を原爆アーカイブズを素材にしながらお話をするということで、今日のトーク方向を大きく外れることはいたしませんが参考にしていただければと思います。

時間があまりありませんので、どんどん進みますけれども「いまアーカイブズが新しい」ということで、今日の小原さんのご報告にありましたように、日本にも国立公文書館が新しい段階を迎えようとしているわけですけれども、世界的に言いますと昨日でしたか一昨日でしたか、オバマ大統領の新大統領の就任式で、これが(資料 4)映るんじゃないかなと思いましてね、ワシントンの 200 万人の群集が議会に向かって並んでおりましたが、左手の方の議会にかなり近い所にこれがあるわけですね。

私も学習院大学の学生に、オバマさんの就任式のテレビ中継をぜひ見ろとたぶん映るから、これが映ったらあれがナショナルアーカイブズだと言ったんですが、私も目を凝らして見てたんですが、なかなか映りませんでしたね。

(小原:映りました、この前で降りたんですよ、車から。)

そうですか。

(小原:この丁度道端沿いの通りを通り過ぎたところで車から降りたんです。)

それは私が見落としたんですね、だそうです。

そういういわば首都のですね議会に最も近い所にある立派な建物、こういう位置関係、この建物の立派さそのものが、アーカイブズというものを私は象徴してると思うんですね。歴史的に見てもそうなんですね。

アテネローマの時代からアーカイブズというのは決して古い記録をしまっ

ておく蔵ではなくて、せめて単なる記憶装置、記憶装置という言い方をすれば、これは単なる古い記録をしまっておくだけでなくて現代に活かすという意味がかなり鮮明に出てくる表現だと思いますけれども、そういう現代に活かすその組織や国にとっての一番重要な記録を保存する、その国にとっていわば最も重要な施設の１つであるということがですね、この建物の規模や位置関係に表れてる、ただ墓標としてでっかい建物作ってるわけじゃないんですね、というふうなことを、まあよく話をするんですが。

こういう伝統的な巨大なアーカイブズ、その中にはこういった（資料５）アーカイブズボックスの中に入っている紙記録というものが入っている。

これは伝統的なアーカイブズの形だというふうに思うわけですが、近代は様々な形でアーカイブズ活動を展開して参りまして、国のレベル或いは地方公共団体のレベルでの日本におけるアーカイブズの広がりというのは先程の小原さんの話にも若干出てまいりましたけれども、それ以外にも（資料６）少し書きましたように、私の後でお話いただく大学文書館、京都大学文書館を中心としたような、University Archives、高エネ研を代表して、幸い書いてありますけれども、こういった自然科系を含む様々なInstitutional Archivesと言うんでしょうか研究機関のアーカイブズ、それから当然大きな分野を占めますのはビジネスの世界ですね企業アーカイブズ、これも日本の場合どんどん増えてるというわけにはいきませんですけれども、少しずつ増えているところではないかと思います。

それからここには佼成文書館としましたけれども宗教団体、宗教団体とは限りませんが様々な民間の或いは半官半民的ないろんな団体、組合とかも含めるとは思うんですけれども、色んな団体が自らのアーカイブズを持っていくという方向も少しずつ生まれてきている。

（資料７）またＮＨＫアーカイブズ、ＮＨＫアーカイブズはいわば新しい媒体、映像という１つの媒体を中心に古い放送映像を保存して、これを準備、利用出来るようにするシステムということで、また新しいタイプのアーカイブズというふうに言うことが出来るわけですが、こういった新しいタイプのアーカイブズも少しずつ広まってきていることが出来ると思います。

新しいタイプのアーカイブズの中から１つ２つご紹介すると、（資料８）ちょっとよく見えないかも知れませんが、日本建築学会では建築アーカイブ

ズ小委員会というものを設けて建築アーカイブズを作っていこうというような運動を前々から行っているわけですね、建築の世界でも図面とかですね、様々な写真とか、そういった建築の世界独特の記録史料というものがあるわけで、それだけではないと思うんですけれども、特にそういった重要な建築の世界ならではの図面記録等々を保存していく必要があるということで建築学会が取り組んでいる。そういう点では物理学会などもおそらくもっと前から学会としての活動をやっておると思いますし、化学の方でも京都あたりでそういったあれは何と言う名前でしたでしょうか化学アーカイブズのようなものを作っていく、そういう集会をもったという記事を読んだ事がございますが。

それから何と言うか、芸術部門と言いましょうか脚本アーカイブズ会館を作ろうなんていうこういう記事も出ておりますね。

放送作家協会が台本とかそういったものを散逸から守っていこうというような動きもあると、いうふうなことでいろんな分野でアーカイブズという言葉と共にこの過去の記録保存していこうという動きは決して華々しいというわけではありませんが、少しずつ広まりつつあるというのがこの近年の動向ではないかというふうに思います。

（資料 10）大きく見るとですね２つの特徴といいましょうか、２つの流れがあるように私には感じれるわけですが、１つは組織の記録をちゃんと保存して公開していこうという主としてこれは行政、国や地方自治体それから企業などにもこういった考え方が広がっていて、情報公開の問題とかですね、カウンタビリティー、行政活動や企業活動、社会のために存在している国民に対して自分達がどういう活動をやっているかということをきちっと説明していかなければならないという、いわば組織活動の透明性を確保するために記録を保存して公開していくというふうな考え方から、アーカイブズを作っていこうとひとつの流れがあるのかと思います。

それからもう１つの流れというのは、ある特定分野の記録を保存していこうという、先程ちょっとご紹介したような建築アーカイブズとか或いは脚本アーカイブズなどというのはどちらかというとこちらの流れになるんでしょうかね、過去の様々なそれぞれの分野での過去を記録して伝えていくことの大切さというものが、いろんな分野で認識され始めているんだろうとい

うふうに思います。

特に戦後60数年経ってですね、世代交代が進んできているというふうなことで、戦後の日本の様々な分野の発展を支えてきた人達がそろそろ第一線を退く時期にも丁度あたってきているという時に、その分野での様々な記録というものが風化しつつある、これを何とか食い止めて未来に繋げていきたいという意識が広がっているという事も1つの背景にあるのかも知れません。

それからもう1つはデジタル化というふうな技術的な進歩というものがあって、こういった物を積極的に活かす条件がいろんな所で出てきたということが手伝って、じゃあ、うちの方でもデジタル化を進めて様々な活動を伝えていこうという動きがいろんなところに広がってきているというような幾つかの要因があるかもしれませんが、そういった形でいろんな分野で自分達の分野の記録保存していこうという流れがあると思うんですね、アーカイブズという立場から見ると本来的な意味と言うのはやはり（資料10）①にあるというふうに本来は考えられます。

やはり行政や企業やあらゆる組織活動というものがですね、やはり社会の中でどういう活動をやっているかということを、人々にちゃんと知らしめて行くというその活動というのがアーカイブズ活動の基本であって、いわばそれが民主的な市民社会を、民主主義を支えている基本であるということだろうと思うんですね。

従って（資料10）②のほうにある特定分野に特化した記録保存活動と書いてあっても、私はそこだけではなくて（資料10）①のような考え方と密接に関わりながらですね、記録保存を進めていく必要があるのではないかという気がするわけです。

例えば先程（資料8）の建築アーカイブズを1つ例にとってみると、ややもすれば建築関係の図面が非常に重要だと、位置的に重要だということでいろんな所にある建築図面だけを1つに集めて、これを保存してけばいいというふうな考え方があるかもしれません。

例えばあるビルを作るということになりますと、そのビルに関する図面というのは1つはそれが例えば公共的な建物だとすると、その建物を企画して設計依頼した例えば地方自治体とか、国とかいう行政体の中の行政文書1つとしてそのビルの建築計画書というものが出てくると思うんですね。

それを軸に発注をして建築を実際に行う、これは一般建築企業、建築会社ですが、会社の中にそういった建築過程の記録が生まれてくる。

それをばらばらに集めてきて1つの非常にユニークな建築が出来たと、この記録は残しましょうというふうな形で残す。

それがある意味この（資料10）②のある特定分野の記録保存になるわけですが、考えてみればそうではなくて、これは企業にとっては企業活動の一環でもあるわけで、ある特定の建築記録だけを残していったんでは企業活動の中でその建築物というのはどういう位置付けで行われたのかということが正確に伝わらない。

それから行政にとってみてもですね、いろいろある行政記録の中で、ある特定の建物を発注した記録だけがたまたまその建物が非常にユニークであって私的に面白いからというんでその記録だけを抜き取って、そして別に保存されるのは非常に偏った本来的な記録の意味が正確に伝わらないということになるわけですね。

だからやはりそれぞれの建築記録が行政の中にあり、企業の中にある場合には、行政文書の行政たる活動の一環として、つまり（資料10）①の組織記録の一環として保存されていく、一方で企業の建築会社においても組織の企業記録の一環として保存されていく、そちらが（資料10）第①番目だと思うんですね。

それでその関係する建物の建築関係記録がいわば検索出来て、それで1つのテーブルの上で共通して関連付けてリンク付けられて利用出来ればいいわけですが、これは利用システムの開発の問題であって本来的にはそれぞれの記録がどういう組織の中でどういう背景で生まれ、というような事がきちっと説明できる形で保存管理されていかなければ本来的にそれぞれ記録の意味というのは正確に伝わっていかない。

そういう意味におきましても、やはり組織記録という位置付けがまず第一にあった上で、ある特定分野の記録保存というものも可能になっていくのであろうというふうに考えるわけです。

さていろいろな考え方があるわけですが、天草アーカイブズというのが出てまいりましたけれども、私が設立に関わりました、九州の元は本渡市と言いましたけれども、合併して今は天草市というところに出来ておりますが、

市の公文書館である天草アーカイブズという所は３つの理念というものを謳っております。

行政体、地方自治体ですから当然市に移管しているわけですけれども、ここで掲げている３つの理念というものはいわばアーカイブズというものを私が申し上げたような本質というものを端的にわかりやすく表現しているんではないかと思って、ちょっとご紹介をしておきたいと思います。

天草アーカイブズというのは基本的に行政体が作っている公文書館ですから、市の行政文書をきちっと保存して管理していることが基本的な任務である。

それと共に特に市町村のアーカイブズの場合はそうだと思いますが、地域に見合う様々な民間資料、この民間資料も本来はそれぞれの民間団体とか民間企業が自分の所で保存してアーカイブズを作っていくのが理想なんでありましょうけれども、なかなかそれは難しいといった場合に、地方自治体が手を差し伸べて、これの保存・管理に協力していくと、場合によっては行き場の無い地域の資料を引き受けていくという、そういう活動がどうしても必要になると思います。

従いまして、天草アーカイブズでは行政文書と地域資料を２つの柱といたしまして、資料の保存活動を行っているわけですが、その目的を３つ掲げているわけですね、第１は（資料 12）上のほうにあります「市民による地域文化創造の拠点に」ということで、まさに地域文化創造の資源として文化的な資料として歴史研究だけではありませんけれども、様々な文化活動の資源として行政文書が地域資料を活かしていく、これが伝統的なわかりやすいアーカイブズの考え方だろうと思うんですね。

２つ目は左下のほうに「より開かれた市政運営をめざして」ここらあたりで近年、非常に強く言われている透明性の問題とか情報公開、こういった問題との関わりが出でくるわけで、今情報公開条例というのは殆どの自治体に出来ておりますけれども、比較的新しい情報に特化している、限られている所が多いと思うんですけれども、かなり古い市政情報であっても、それを市民にちゃんと提供して、過去、市政が何を行ってきたとかいうことを説明出来なければいけない。

それを行うのがアーカイブズの大きな役割の１つでもあるという事でですね、情報公開機能の１つとして、より開けた市政をということを２つ目

に掲げております。

今申し上げた２つ上と左下というのはどっちかというと市民向けの顔なんだけども、基本的にはアーカイブズというのは市民向けの顔を持った文化施設、市民向けの施設なんだけれども、それだけじゃなくて今回の国立公文書館で先程小原さんがご紹介された有識者会議の最終報告書にも沢山出てまいりましたけれども、決して外だけじゃなくて内側と言うんでしょうかね、行政そのものにとってもアーカイブズシステムの整備或いは記録管理システムの整備というのは非常に役立つ物だということを訴えたのは、右下の所に書いてあります。

つまりこれを行政の自分達の行政を行うための情報資源としてどう活かしていくかということなんですね。

これは比較的今までアーカイブズ活動の中ではあまり強く訴えられてこなかったところで、従ってアーカイブズ作ると言うと、そういう余計な物に今金は出せないというふうな言われ方をしたわけだけれども、そうではなくて、行政の最も有効な施設なんだというもっともっと強く訴えていかなければいけないということが、右下のところに表れている事です。

この３つの理念というのは、おそらく行政のアーカイブズだけじゃなくて、企業とか或いはこういった所の単独の研究機関等のアーカイブズについても、同じことが言えるんじゃないかというふうに思います。

これは（資料 13）そういったところをまとめたひとつのアーカイブズの理念的な整理と言うんでしょうか、改めて言うことはないと思うんですけれども、アーカイブズというのは過去を忘れずあやまちをくり返さないということと、それから人間としての権利を保障し安全な生活を守るという平和と民主主義のための施設であるということですね。

年金の問題とか薬害の問題、欠陥自動車のリコール隠しとこういったところでの具体的な事例がいくつも最近挙げられるようになってきたというのは、ある意味で悲しいわけですけれども枚挙に遑がないというところであります。

さて先を急がなければいけませんけれども、アーカイブズの重要性というものをそれなりに認識されたとして、それを支えるのはやっぱりひとつが知識であり技術で、それを実行する人材だということが言えると思います。

施設と制度というのも重要なんだけれども、施設と制度を動かすのは人であると、人を動かすのはやはり絶えざる新しい知識と技術であるというふうなことで、世界の新しい研究にい学びながら、常に新しいアーカイブズ学の知識や技術を導入していく必要があるだろうと思います。

というわけで今は電子社会ということで技術そのものがどんどん革新がされていますので、そこのところをどういうふうに導入していくかということは、これは非常に大きな課題になっているわけですね。

私達ごく簡単にご紹介しますと、そういった物のアーカイブズ学 archives science、archives studies という言い方をしますけれども、解りやすく言えば資源研究と管理研究と言いましょうかね、その対象となるアーカイブズとは一体何ぞやと言うことをしっかりと研究する。

過去の古い記録だけじゃなくて現代の電子情報も含めたアーカイブズ資源とは一体何ぞやと、アーカイブズ資源と言った時にいったいこれを社会の中でどういうふうに役立ちうるものなのかとを理念も含めてですねしっかりと研究していく、説得力がある考え方を提供していく事をして行かなければいけないだろうと言うふうに思います。

それから管理研究というのは実際にアーカイブズというものを具体的に管理し評価、選別しそして残した物をどういうふうに整理して情報提供して活用していくのかという具体的な管理方法の研究、システム開発こういったところにかかわる分野でいくつものを小さな分野に細分化されていくかというふうに思います。

これは（資料 16）国文学研究資料館で 2003 年に出したアーカイブズの科学上下という本でありますけれども、日本のアーカイブズ学研究というのは近年比較的従来に比べれば前進をしているように思いますけれども、まだまだ研究を担う研究者の数が絶対数が非常に少ないためにですね充分な成果をあげているとは言い難い、こういった本をどんどん凌駕する新しい研究成果が出てきてもらいたいというふうに常日頃思っているところです。

幸いにしまして 2004 年に日本アーカイブズ学会というものが出来てですね、この中にも会員になって頂いている方もいると思いまけれども、先程申し上げたようにアーカイブズの世界いろんな分野に広がって、いろんな分野というよりも全ての分野にありうる事なわけなので、あらゆる分野でこう

いったアーカイブズ活動に携わる人達がそれぞれの分野での経験をですね考慮しながら日本のアーカイブズ学を作っていく必要があると思うんですね。

その際には当然世界のアーカイブズの研究の最新成果等々も学ぶ必要があるということでその橋渡しをしようということで、学会が出来たというのは喜ばしい事だろうと思います。

今日お手元にチラシを1枚配らせていただきましたけれども、これが日本アーカイブズ学会と国文学研究資料館のアーカイブズ学、荒勝研究系との共催で予定されております、一番近い直近の研究紹介をしたいと思います。

来月の21日に国文研でございますが、今日のちょうど皆さん方の関心に近い所で研究記録のアーカイブズということで、筑波技術大学の高岩先生にもご報告を頂く事になっておりますが、東大社研の佐藤先生に社会化研究分野でのデータ化などのお話もしていただくことになっておりますが、こういった研究集会を通じてアーカイブズ学の親展を図っていくということが非常に重要なんではないかというふうに思います。

一方アーキビスト教育という点で申し上げますと、実はかなり早くから80年代になりますけれどもICA（International Council on Archives：国際文書館評議会）とか日本学術会議というようなところから公文書館の中に専門職員をおけというふうなそういった提言、報告、度々出ているわけですね、なかなか公文書館制度そのものがなかなか前に進まないということもありましたけれども、それに伴って、それと同じ様になかなか専門職員の養成というのも必ずしも充分に進んでこなかったと、原型を申し上げますと（1）、（2）、（3）というところで国文研、それから国立公文書館、それから企業史料協議会というようなところで研修会というものがそれなりに充実をした形で提供されております。

大学や大学院でも東大を始めとして、いくつもの大学で10年くらい前からいろいろなコース或いは講義というかたちでの提供は行われていたわけですが、今ようやく去年の4月に学習院大学の大学院にアーカイブズ学専攻と言う単独の専攻が設けられましたので、形の上では一応日本にもアーキビスト養成の大学院が出来たと言うことにはなったわけですが、まだほんとに出来たばっかりでありまして、しかも出口のほうはよく見えないと養成コースをつくったけれども、実際就職口はあるのかというふうなそういう声も聞

かれるわけですね、まあそういった就職口といいましょうか、就職口と言うと少し生々しい言い方なんですけれども要するにアーキビストが活躍できる場、専門職が活躍できる場とそれからそれを養成する教育の場というのが共に充実をしていかないとですね、やはり日本のアーカイブズ制度というのが本格的な形で回転し始めないというふうに私は思いますので、今回の有識者会議の最終報告書が功を奏して国立公文書館を中心に国の制度が充実しそれがやがて地方自治体に良い影響を与えて、それが民間にもだんだん拡がっていくというふうな形で制度が整い、やがてそこにアーキビストというものが配置されて行くと、いうふうな事がですね並行して行われていくということが望ましいというふうに考えます。

さて「原爆アーカイブズに期待する」というところが本来は中心なわけですが時間があまりありませんので簡単に申し上げますけれども、先程ちょっと述べたように１つの機関つまり原爆関係のこれから原爆被ばく関連資料というこの話に特化してしまいますけれども、それぞれ皆さんご自分の関心ある分野にひきつけてお聞きになってくれればいいわけですが、やはりですね一番重要なのは関連資料を集めるという考え方がひとつあると同時に、やはりそれを生んだ様々な組織ですねそれにやっぱり目を向けるという事ではないかと思うんですね。

最初の私の２つの流れで言えば２つのその流れの両方に目を向けると言うんでしょうかね組織の記録と言う見方と、ある分野の記録と言う見方を常に両方見失わないということがやっぱり必要ではないかというふうに思います。

まず分野と言うか関連資料という観点で言いますと、原爆被ばく関連資料というのは非常に多様な物があるわけです。

私も広島・長崎の研究所を２、３度訪問させていただく機会があったわけですが、非常に驚きました、予想はされたことですけれども、つまり私達が知ってるような伝統的な紙記録などというのは、これも非常に量が多くて右の方にありますいわゆる文書とかカルテ類ですね写真とかフィルムこういった物も沢山あるわけですけれども、それに数倍する平面を占領しているのはこの医学標本、被ばく資料のこういった物資料なわけですね、それからいわゆる購入図書とか関連する新聞の切り抜き等々、こういったいわば図書館的な資料というのも大量にございます。

こういった物を総合的にどう保管していけばいいかという事が、関係研究機関の関心事なわけですね、当然そういった様々な資料の保存には様々な学問分野の知識、技術が導入されなければなりません。

私の非常に限られた知識から申しあげるならば、やはり医学標本とかですね被ばく関係の様々な物資料、つまり壊れた眼鏡の枠とかですねいろんなものがあるわけですね、干からびた弁当箱とか真っ黒に焦げ付いたお米が炭化した物とかそういったものが沢山あるわけです。

そういった物資料、まあこれは博物館資料と簡単に言ってしまっていいのか解りませんが大きく分ければそういった物になるので、博物館学の知識というものが最も役に立つんではないかと思われますし、図書とか新聞などにつきましては当然、図書館学、図書館情報学というものがあるわけですね、それから比較的最近だと思いますけれどもアーカイブズ学というようなものがこの文書とかカルテ、写真、フィルム等といったものにつきましては役に立つというふうに考えます。

これでそれぞればらばらにやってそれでお終いというふうにはならないわけで、総合的に管理して総合利用、全体的に利用していくことが当然必要なわけですが、その場合に、物として保存するためには当然 Conservation Science と言いましょうか、資料保存科学、文化財科学等を含めた Conservation Science というものが役に立つ、これを全体的に総合的に利用していくシステムを開発して行くためには、やはりそれぞれの資料のデータといいましょうか情報というものを集約していくといった研究過程、作業過程が必要になってくるわけで、まあ documentation と言いましょうかね、ミュージアム資料であればミュージアム資料がそれぞれどういった情報内容を持っているかということを情報のメタデータというんでしょうかを収集して蓄積していくという作業過程、それはやっぱりそれぞれの分野の資料についてこういうふうに行われてそれもひとつの一定の様式の基にまとめていくという作業過程が必要だと思います。

その際に、その考え方のひとつとして Archival Science というものがこの総合化の中で役に立つのではないかと、この図の中では Archival Science だけから矢印が入っていますけれども、お昼休みにちょっと友人と話をしてましたけれども、こういった情報の総合化、つまり分野を超えた情報の総合

化につきましては決してArchival Scienceだけじゃなくて博物館学の世界にとってはかなり前からこういった、つまり博物館資料だけじゃない、他の様々な媒体の資料についてのデータの総合化につきましても、いろいろな研究成果を持っている分野があるわけなので、そういう意味では不充分かもしれません。Museum ScienceやLibrary Scienceからも総合化の所に矢印を入れるべきかもしれませんけれども、何れにしましてもばらばらではなくて、そういった各分野での研究成果を総合化しながら1つの大きな枠の中でお互いに総合化して情報を共有出来るようなこういうシステムというのが当然出来ていかなければならない、そういったところでArchival Science、アーカイブズ学というものがもっと役に立っていかなければ、いけないんじゃないかなという気がまったくします。

それからここにはArchives Projectと書きましたけれども、ちょっと英語がたくさん出てきて恐縮ですが、これは実際には広島大学で講演を行った時に、実際にいくつかの研究機関の方々が自分達が持っているところの原爆関係資料をそれぞれアーカイブズを作って保存していきたいというような時にですね、何らかの参考になるようにということで私の考え方をお示しをしたそういうことなんですけれども、それぞれの研究機関の中でこの原爆関係資料のアーカイブズというのを作っていく時に、それをArchives Projectと仮に呼ぶならば、研究機関のアーカイブズを作って行くという事で考えるならば、こういう対象をまずちゃんと考えていく必要があるんではないかと思うのです。

まあ同芯円ということで3つありますけれども、一番外から説明しますとProject recordsということで事業記録、研究データ、収集資料、実際研究機関で一番メタとする言うんでしょうかね、一番保存したい活用したいと思うのは一番外側つまりその研究機関の業務、目的として行っている事業、研究その結果発生したデータや資料をこれを何とか他には無い物なので保存して行きたいという所で一番外側のところがやはり一番目立つと言うんでしょうか、関心の対象になるんだろうと思いますが、それだけではやはりある特定分野の特化したアーカイブズになってしまうという事で、それを支える実は中心の核となる2つがあるんだということを示しているんですね、真ん中にあるのはVital recordsとその周りがGeneral recordsと書きまし

たけれども Vital records というのはその研究機関でも何でもいい訳ですが、その組織を設置する基本的な根拠となるような文書或いは意思決定を行うような様々な議事録とかそういう文章がまずあると思います。

General records というのはその周辺にある人事とか会計とか庶務と言った毎年こう発生するようないわゆる事務文書ですね、得てしてこの辺りが特に２つめの円の所がやや軽視されがちではないでしょうか。一般的に言うと、真ん中の所は結構例えば組織の創立に関する記録とか、或いは意思決定に関する重要な議事録なんていうのはこれは誰が見ても重要だから保存して行きましょうという事で、あと重要なのは一番外側の研究所の研究データとかそういう事業関係の記録だと、２つ目のところは人事、会計、庶務こういうのは毎年出てくるような物だからこれは特に要らんじゃないかと、そういうなんとなく一般的な感覚があると思うんです。

やはりそうではなくて、全てを残すというんではないけれども、この３つが揃って始めて研究機関としての１つの機関の活動の全体像が見えてくるという事ではないかと思うわけです。

容易に想像出来る事ですけれども、その研究所が行っている研究活動というのは単独に存在しているんではなくて、当然そこの研究所の職員が何らかの給料を貰いながら或いは予算をとりながら実施しているわけですから、その基本的な研究実施に関する背景を知るためにはその人事、会計、庶務というそういう事務文書を見なければわからないことが非常に多いわけです。つまり言ってみればその研究データや研究に伴って発生する事業記録の背景となる Contextual information というのは、むしろ上側の特に真ん中の所に強く含まれてくると言う事ではないかと思うんです。

そこの所が無いと、ある研究機関が、ある特定の年度にある研究を行ったのは一体何故そういう研究がそこで行ったのかという背景も解らないし、そこで何らかの成功やら失敗やらいろんな紆余曲折があると思うんですが、そこのところの流れというものが伝わっていかないとそれを示すのはあくまで General records の中にあると言うことではないかというふうに思うんです。そういう意味で言えばやはり私達は記録という物を見る場合に、ただコンテンツつまり特に一番外側のプロジェクトの records のコンテンツが最も興味の対象となるわけだけれども、そのコンテンツから出発するんではな

くてそれを支えるコンテクスト言いましょうか、周辺情報、背景情報むしろ土台情報と言っていいかもしれない、そちらにこそ、むしろ目を向けるべきではないかというのが考え方で、それがあって始めて記録の総合性 Archival integrity という言い方もいたしますけれども、というものが保障されて Archival integrity というものが保障されて始めて個々の研究データや研究情報の証拠性というのが保障されるという考え方ではないかと思うんです。

（資料 22）ここはですね実際そういう考え方でアーカイブズを立ち上げるのにはどれ位の機関と人がいるのかというご質問などが想定されたので、ちょっと具体的に考えてみた所でありますけれども、研究機関にとって高エネ研のような巨大な研究機関から国文研のような弱小研究機関までいろいろありますから、アーカイブズを作るって言ったって様々な状況の違いというのがあると思うんですけれども、流れとしては基本的に 3 段階あって、まず最初は現況調査、どういった所にどういう記録があってどういうふうに劣化しているのか同時に今どういう状況で記録が発生しつづけているのかということも含まれていると思いますが、そういう記録の残り方、発生の状況と言うのも調べてた上で第 2 段階として Program design、どういうふうに整理をしていくのかどういう評価選別方法をとっていくのかというふうな第 2 段階もあろうかと思います。実際にそれを起こし始めるのが第 3 段階という事になろうかと思いますね。

そこでデジタル化なども場合によっては考えられるということで、右の方は特に見なくてもいいんですが、大きく研究資料、先程の図で言えば一番外側の円の部分と機関文書と書いたのが先程の円の真ん中の 2 つだと考えて下さい。Vital records と General records、そういうふうに分けて調査していくためには Archivist , Conservator が何人くらい何日くらい働けば大体出来るかというのを非常に大雑把に書いたわけなんですが、これはちょっと見ないで下さい。

これまでの話は単独の研究機関、特に自然科学系の研究機関を作っていくときの考え方なんですけれども、原爆アーカイブズを念頭においた場合に単独で考えていくだけではやはり不充分であって、特に原爆の場合には日本の管理研究機関さらにはアメリカを中心とした海外にある研究機関とのネットワーク化というのはどうしても避けられないというんです。

それを示したのがこういう事で（資料 23）、日本の場合には仮に 4 つ位の関係機関があるとすれば、それぞれの中に機関内アーカイブズというのを作っていくということで、その中にも濃い青で書いたところが研究機関の研究データ収集資料、つまり最初の同心円で言えば一番外側の部分ですね、ちょっと先程の図と円が逆になってますけど、周辺にある薄い青のところが機関文書というようなことで、いわば事務文書、Vital 文書にあたるわけですが、そういった形での Institutional Archives を構築した上でやはり何らかの形で日本の中に原爆アーカイブズセンターというのを作って貰いたい提案をした、と言うことで、特に原爆アーカイブズを念頭におくならば連絡機関としてのセンターが必要ではないかということを申し上げました。

これは分野別のこういったネットワークを作ると言う考え方で言えば或いは他の分野においても同じ様にセンター的なものになっていく必要かもしれませんが、学会等がこれを代行することも可能かもしれません。

あとこれは単純な話で国内の関連するアーカイブズや博物館や図書館、大学等々の研究機関それから海外との連携これもやはりセンターを設けていけばそこを核にして連携がとりやすいというようなことを示しました。

これが最後なんですが、これはオバマ大統領の就任式の時に映ったかもしれませんけど、アメリカの国立公文書館の建物周辺に 4 つのこういう石像が並んでいてそれぞれの台座に素晴らしいキャッチフレーズが書かれているわけですね、そのうちの 1 つがこれであって、The heritage of the past is the seed that bring forth the harvest of the future（過去の遺産は未来の収穫をもたらす種子である）というふうに書かれておりますが、ちょうど 3 年くらい前の今頃の季節に行った時にですね、ものすごい雪景色の中で撮った写真ですが、これを最後にして私の話を終わりたいと思います。

ご期待にそえる事が出来たか解りませんが、以上で終わりたいと思います。

有難うございました。

＜質疑応答＞

松岡：安藤先生のお話にも小原さんのお話にも出てくるんですけれども、record という言葉と文書という言葉があるんですが、それは使い分けてされておられるんでしょうか。

安藤：record と文書ですか。

松岡：record と document は全然違うんだと記録管理学会で教わったんですけれども。

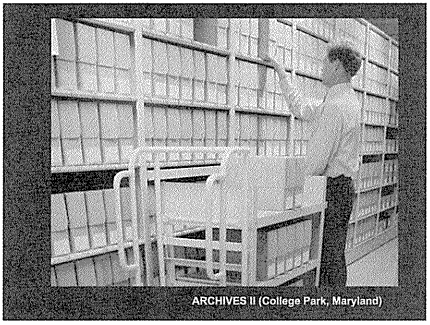
安藤：えーと、そうですね厳密に言えば勿論違うんだろうと思いますけれども、今日の私の話の中では文書というのも言いましたかね、あまり厳密に今日は使い分けてはおりません。記録管理学会なんかでは文書管理と記録管理をかなり厳密に分けてんでしょうかね。まあ常識的な分け方で言えば文書というのはやっぱり文章、記録はフィルムとか映像とかも含めたかなり幅広い媒体も含めた、私の頭の中ではどっちかと言うと媒体ですね、何かその保存の一種の中にある特定の段階を文書で、ある特定の段階を記録と分けるというそういう考え方もあるかもしれませんけれども、それに反対するという意味ではなくて、私が使う時には主として媒体で分けて考えていて、そういう意味では文書という言葉を私はあまり使わないようにしているんですけれどもね、文書管理とか文書とか使う時はいわば人が使っている、あるそういう名前で文書館とかですね、いうふうに言ってる時は勿論そう使いますけれども、自分の中では文書という言葉は特定の意味を出して使わないようにしているんですけど。あまりつっこまれるとですねそんなにはっきり分けていないので、ぼろが出てしまいますが。

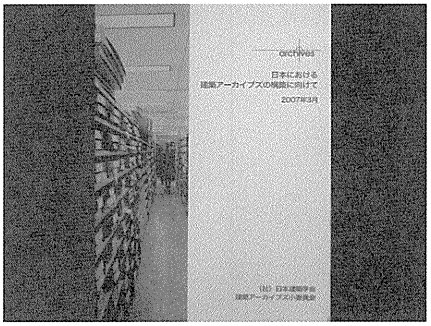
アーカイブズ学の動向と科学情報資源の保存・活用方法のあり方

人間文化研究機構 国文学研究資料館 アーカイブズ研究系
総合研究大学院大学 文化科学研究科
安 藤 正 人

1. いまアーカイブズが新しい
2. アーカイブズ学とアーキビスト
3. 「原爆アーカイブズ」に期待する

1. いまアーカイブズが新しい


ARCHIVES II (College Park, Maryland)



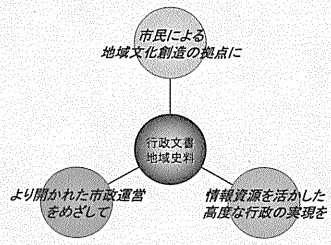
アーカイブズ：2つの流れ

①組織記録の保存・公開
- ・主として行政機関や企業
- ・情報公開やアカウンタビリティ→ 透明性

②ある特定分野の記録保存
- ・組織内記録だけの場合と収集を含む場合とがある
- ・過去を記憶することの大切さの再認識

→アーカイブズの本来の役割は両方

天草アーカイブズの三つの理念



アーカイブズとは
“平和と民主主義のための記憶装置”

□過去を忘れず、あやまちをくり返さない（＝平和のために）
- ・行政、軍隊、企業、団体の記録（戦争と平和）
- ・個人の生活や闘いの記録など

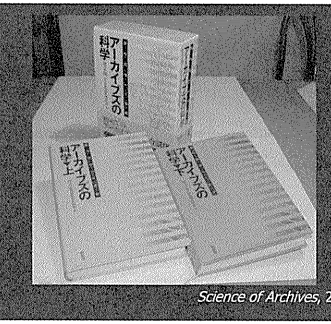
□人間としての権利を保障し安全な生活を守る（＝民主主義のために）
- ・行政の記録（住民福祉、年金記録！）
- ・企業の記録（薬害、欠陥自動車の情報隠し！）

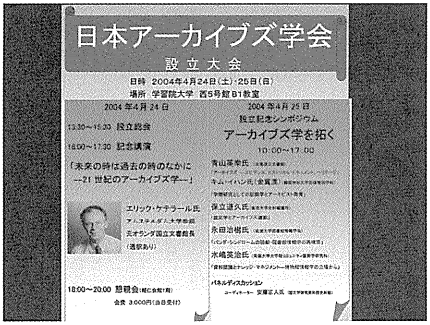
2. アーカイブズ学とアーキビスト

アーカイブズ学とは？

archival resource studies
アーカイブズ資源研究
- 歴史情報資源学 historical information resources（史料学、記録管理史など）
- 現代記録情報学 modern recorded information（組織体情報論、電子記録論、オーラルヒストリー等）
- その他

archives administration
アーカイブズ管理研究
- アーカイブズ政策・制度論 archival policy & systems
- 記録管理論 records management
- 記録評価論 archival appraisal
- 記録史料調査論 archival survey
- 編成記述論 archival arrangement & description
- アーカイブズ情報学 archival informatics
- 保存修復学 preservation and conservation
- その他





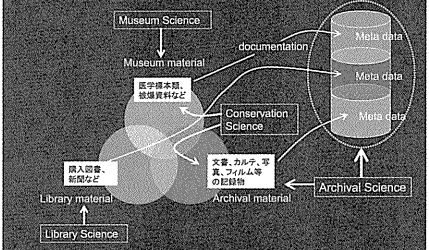
日本のアーキビスト教育

勧告
- 国際アーカイブズ評議会(ICA)
  1986 ICA報告「日本における文書館発展のために」
- 日本学術会議
  1988、1991「公文書館専門職員」の養成体制について報告

現況
(1) 人間文化研究機構国文学研究資料館アーカイブズ研究系
「アーカイブズ・カレッジ」(6週間コース、1週間コース)
(2) 国立公文書館
「公文書館等専門職員養成課程」等
(3) 企業史料協議会Business Archives Association
「ビジネス・アーキビスト研修課程」
(4) 大学・大学院の関連コース
東京大学(文化資源学、情報学環)、お茶大・駿河台大・別府大など
学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻設置(2008.4)

3.「原爆アーカイブズ」に期待する

原爆被ばく関連資料の保存・活用：アーカイブズ学からの提案



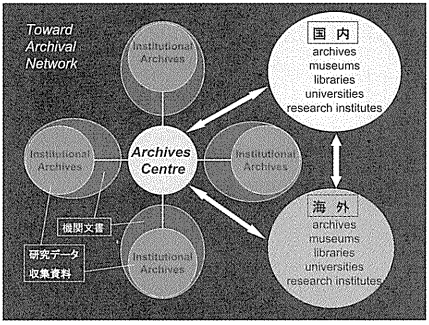
Archives Project ～Institutional archivesの構築～

対象

Archives Project ～Institutional archivesの構築～

実施

			研究資料	機関文書
1st stage	Archival survey	現況調査(場所、種別、数量、劣化度状況など)	Archivist 1 Conservator 1 Researcher 5 20 days	1 1 5 30
2nd stage	Program design	段階的整理計画、評価選別方針、保存修復計画、利用計画など	Archivist 1 Conservator 1 Researcher 2 20 days	1 1 2 30
3rd stage	System construction	整理、保存、修復、複製(デジタル化)、利用システム構築など	Archivist 1 Conservator 1 Researcher 5 3 years + α	1 1 5 ∞



THE HERITAGE OF THE PAST IS THE SEED THAT BRING FORTH
THE HARVEST OF THE FUTRE

(過去の遺産は未来の収穫をもたらす種子である)